＜外国語＞

主体的・対話的な活動を通して系統的な学びを構築する英語科学習

～児童の「知りたい！」「伝えたい！」思いから生まれるコミュニケーション能力の育成～

大垣市立興文小学校　教諭　田中　宜子

概　　要

本研究は，絶え間なく変化していく社会を生き抜いていく児童が，予測困難な状況の中で思考しながら自分も相手も大切にできるコミュニケーション能力の育成を目的とする。そこで外国語教育における対話活動を通して，目的や場面・状況を明確にすることで児童自ら課題を克服しようとする主体的で対話的な態度を育てる指導の工夫を実践した。小学校段階で求められる英語の資質・能力から中学校ではさらに高度な技能が求められることにギャップを抱える児童が多い現状があるため，児童の意欲を引き出す単元構想や単位時間における活動の工夫を行い，小学校段階から系統的に学びを構築していく指導と評価の一体化の実現を図った。本実践を通して，予測困難な状況や，自分の思いと現実の課題との間に生まれる思いの葛藤をする状況の中でも，自ら課題を克服するために思考を働かせ，自分と相手に合った臨機応変なコミュニーション能力の育成を図る指導の工夫を通して，系統的に学びを構築する児童の育成にもつながると実感した。

１　主題設定の理由

（１）学習指導要領から

小学校の英語教育は，児童の日常生活に身近で簡単なやり取りを通して，英語を使う楽しさや自信を育てる段階である。学習指導要領では，外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，聞くこと・話すことの言語活動を通して，コミュニケーション能力の素地となる資質・能力を育成することが中学年の目標とされており，以下のような資質・能力を育成することが目指されている。

○外国語を通して，言語や文化について体験的に理解を深め，日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
○身近で簡単な事柄について，で聞外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
○外国語を通して言語やその背景にある文化に対する理解を深め，相手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

５・６年生になると，英語は「教科」として位置づけられ，以下のような資質・能力の育成が目指されている。

○外国語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどについて，日本語と外国語との違いに気付き，これらの知識を理解するとともに，読むこと，書くことに慣れ親しみ，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身につけるようにする。
○コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，身近で簡単な事柄について，聞いたり話したりするとともに，音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり，語順を意識しながら書いたりして，自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基本的な力を養う。
○外国語の背景にある文化に対する理解を深め，他者に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

授業では，児童の興味や日常生活に密接した話題を題材に，聞く・話す・読む・書くの４技能を統合的に育てる活動を設定する。このように，英語教育では「知識の習得」から「思考を深め，表現する力の育成」へと進化しており，系統的な学びの体系が構築されている。

（２）学習到達目標における系統的な学びの構築

本校中学校区では，英語担当教員で現状を交流し，学習指導要領をもとに学習到達目標を作成し指導に生かしている。学習到達目標の中では，「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」（「読むこと」と「書くこと」は３・４年生では実施しない）の

観点から目標が設定されている。発達段階に応じて設定された学習到達目標に基づいて指導・評価を行うことで，系統的な学びの積み重ねを実現することができる。例えば，「話すこと（やり取り）」の目標から，願う児童の姿の変容が分かる。

＜３年生＞
・自分のことや身近な話題について「はい。」「いいえ。」で答えることができるなど，４５秒の簡単なやりとりの中で①聞かれたことについて②聞いた言葉を真似て③相手の顔を見ながらはっきりと話すことができる。

＜４年生＞
・自分のことや身近な話題について自分がもっている情報や自分の気持ちなどを１分の簡単なやり取りの中で①概ね正確な発音で②相手の理解を確かめながら③自分の考えや気持ちを自分から話すことができる。

＜５年生＞
・自分のことや日常生活に関する身近な話題について聞き出したい情報を得たり，相手に意見を求めたりするなど，１分の簡単なやり取りの中で①語順を意識し②相手の理解を確かめながら③自分の考えや気持ちなどを，理由をつけて分かりやすく④相手の話に反応を返しながら話すことができる。

＜６年生＞
・自分のことや日常生活に関する身近な話題について聞き出したい情報を得たり，相手に意見を求めたりするなど，１分の簡単なやり取りの中で，①概ね正確な語順で②相手の理解を確かめながら③自分の考えや気持ちなどを，理由を付けて分かりやすく話すことができる。

このように児童の発達段階に合わせた系統的な変容が分かる到達目標が，５つの観点に渡って中学校３年生まで設定されている。このような到達目標をもとに，それぞれの学年で付けたい力を中学校区３校の教員間で共通理解を図るとともに，英語に対する苦手意識を減らして小中の円滑な移行ができるように活用することがねらいである。

（３）願う児童の姿

児童は今後，絶え間なく変化していく社会情勢の中で予測困難な将来を生きていく必要がある。不測の事態に直面したとき，思考を働かせながら臨機応変に対応できるコミュニケーション能力が求められる。知識・技能も必要だが，それらばかりでは場面や状況，相手に合わせたコミュニケーションを図ることができない。そこで，様々な場面や状況を作り出す設定を工夫することで，児童の「知りたい！」「伝えたい！」という主体的な思いが生まれる。さらに対話活動を通して，多様な考えをもっている児童と関わる中で，自らの課題解決に向けて思考を働かせながら主体的・対話的で臨機応変なコミュニケーションを図ることができる児童の姿を目指す。

２　研究主題

主体的・対話的な活動を通して系統的な学びを構築する英語科学習
～児童の「知りたい！」「伝えたい！」思いから生まれるコミュニケーション能力の育成～

３　研究仮説

明確な目的や場面，状況の設定や児童の思考の流れに沿った単元構想図の工夫や，単位時間における導入や対話活動の工夫をすることで，児童の「知りたい！」「伝えたい！」という思いが生まれ対話的な深い学びを習得し系統的な学びを構築することができるだろう。

４　研究内容

≪研究内容Ⅰ≫

系統性を重視した主体的・対話的で深い学びを実現する単元開発
①探究的な学びのプロセスを意識した単元構想の工夫
②単元間のつながりを意識し児童の思考の流れに沿った展開の工夫

≪研究内容Ⅱ≫

系統性を重視した主体的・対話的で深い学びを実現する単位時間の在り方
①目的意識・相手意識を明確にする，児童の意欲を引き出す導入の工夫
②学びの調整をする「中間交流」と「振り返り」

５　実践

研究内容Ⅰ・Ⅱについて，**実践Ⅰ**では第４学年においての実践，**実践Ⅱ**では第６学年においての実践を，それぞれ２つの単元を通して行った。

実践Ⅰ

第４学年 Unit5「 Do you have a pen?」Unit7「What do you want?」の２つの単元での児童の変容やそれぞれの単元の成果について研究した。

研究内容Ⅰ－①
探究的な学びのプロセスを意識した単元構想の工夫

英語教育において，知識・技能を習得するだけでなく，興味関心に基づいて自ら課題意識をもち，主体的に学ぶことで新たな発見や仲間のよさから

知識を得る探究的な学びが求められている。探究的に学びを深めていくプロセスとして「課題設定，情報収集，整理・分析，まとめ・表現」が基本とされている。このプロセスを基に，以下の流れでUnit５とUnit７の学習を行った。

＜Unit5＞	＜Unit7＞
課題設定 ・先生のヒントとインタビューを通して情報収集し，より先生にぴったりな文房具セットをプレゼントしたいという目的意識と課題意識をもつ。	**課題設定** ・Unit５での情報とUnit７でのインタビューで得た情報を結び付け，先生の好みに合わせたピザとパフェを贈りたいという目的意識と課題意識をもつ。
情報収集 ・先生のヒントをもとにより詳しい情報を集めるためのインタビューをして情報収集をする。	**情報収集** ・Unit５で得た情報からピザやパフェのデザインを考え，インタビューで具材の好みに関する情報を収集する。
整理・分析 ・先生のヒントと集めた情報を整理し，より「先生にぴったり」を目指して思考する。	**整理・分析** ・Unit５の情報と先生の好みの食材で，デザインや色どりを創意工夫しながら作成する。
まとめ・表現 ・「文房具セット」についてそれぞれの思いを交流する。	**まとめ・表現** ・どんな情報をもとにどんな思いを込めて作成したのか交流する。

このように探究的な学びを深めていく上で，単元の導入において，目的と場面や状況の設定は不可欠である。「ヒントは提示してあるが，それだけでは先生にぴったりな文房具セットが作成することができない」という状況を作り出し，「情報を収集するためのインタビューをする」場面の設定をした。自ら課題を克服するために必要な知識・技能を習得しながら，仲間の表現から新たな発見をし，それぞれの思いに触れながら対話的に学びを深めていく姿が見られた。

さらに探究的な学びにするために，Unit７では場面や状況の設定のさらなる工夫に取り組んだ。「先生にぴったりなピザパフェセットを贈る」ことを目的とし，「ヒントや情報をもとに必要な食材を買い物する」場面において，「お店の人に必要な食材と数を伝えて買い物をするが，その店では在庫不足や売り切れである可能性もある」という状況を作り出す。ここで，児童は「想定外」の状況に遭遇する。必要な物が買えないお客さんに対して，お店屋さんは，何を求められているのかを思考しながら同じ形や色の食材を代替案として，あらゆる表現を用いて提示していく。このやり取りの中で，双方の児童が「先生にぴったり」という同じ目的に向かって思考しながら対話をする姿が増えた。

このように，Unit５において課題となった，場面や状況の設定を Unit７ではより明確でより予測困難な状況を作り出すことで，思考しながら臨機応変なコミュニケーションを生み出すことができる児童の姿へと変容していった。

研究内容Ⅰ－②

単元間のつながりを意識し児童の思考の流れに沿った展開の工夫

児童の思考の流れをスムーズにし，系統的な学びの構築をするために単元間のつながりを意識した。Unit5 では先生についての簡単なヒントを予め提示をした。そのヒントをもとに，さらに先生の好みに近づけるためのインタビューを行った。児童Ａの思考の流れは以下の通りである。

＜提示された先生のヒント＞
・専門教科は音楽
・子供がいて，犬も飼っている
・作曲にも挑戦したいと思っている。

↓

＜ヒントをもとに考えたインタビュー内容＞
・Do you have a notebook?
（作曲のためにノートとペンをあげたい。）
・What animal do you like？
（好きな動物のデザインの文房具にしたい。）

↓

＜インタビューで得た情報を整理する＞
・ノートは持っていないから，２冊あげよう。
・犬とパンダが好きと言っていて，先生の専門教科は音楽だから，デザインに取り入れよう。
・子供と一緒に使えるかわいいデザインにより。

↓

【写真１】＜児童Ａが作った文房具セット＞

児童の思考の流れに沿った活動になるよう設定することで,「先生がもっていない物をあげたい。」

という思いに「先生の好みや生活の中で必要としている要素」を加えることで，より相手意識を強くもった対話活動にすることができた。さらに，ここで得た情報を Unit５だけで終わらせるのではなく，Unit７での活動のヒントとしても取り入れることができるよう，「先生にぴったりな」という言葉をキーワードとした。Unit５で得た情報を生かして「先生にぴったりな」ピザを作成するまでの児童Ａの思考の流れは以下の通りである。

＜Unit５の情報からピザの計画を立てる＞
・犬を飼っているというヒントから，今度は犬の形をデザインしたピザにしよう。
・子供がいるから，みんなが好きそうな具材で，犬の形が作れる具材を選んで好みを聞こう。

＜インタビュー内容の計画＞
・Do you like tomatoes? (耳・しっぽ)
・Do you like potatoes? (頭・体・足)
・Do you like olives? (目・鼻)
・I like cheese.Do you like cheese？
(私の好きなチーズも入れたいな。)

【写真２】＜児童Ａが作成したピザ＞

Unit５で得た情報を Unit７の活動に活用することで，活動や対話表現につながりが生まれ，自然な思考の流れで相手意識と目的意識をもった対話活動を行うことができた。

研究内容Ⅱ－①
目的意識・相手意識を明確にする，児童の意欲を引き出す導入の工夫

児童の主体的な対話活動を目指すには，各単位時間における導入において児童の興味関心や目的意識のある活動の見通しがもてる工夫をすることが重要である。

Unit５の第１時での導入では，「魅力がいっぱい！文房具の世界」をテーマに，世界各国や最新の文房具など文房具に興味をもつことができるような紹介した。単元の導入として,「おもしろい！」「知らなかった！」という思いから児童は興味関心をもつことができた。また，第４時の「先生にぴったり」に近づくためのインタビューを行う時間の導入では，「先生にぴったり」とはどういうことなのかという思いをもつために，HRT と ALT とのやり取りを通して考えた。HRT が ALT の好みではない文房具セットを作成し，「I made a stationary set for you. Here you are.」と言って ALT に渡すと ALT は「Oh…No thank you.」と言って怪訝そうな顔をして断る。このようなやり取りを通してなぜ ALT は喜んでいないのかを児童に問うことで，児童は「ALT の好きな物や欲しい物が入っていないから。」「ALT の好きな色やデザインにしたらいいのでは？」と「先生にぴったり」に近づくためのアイデアを児童から出すことができた。この導入のやり取りを踏まえ，「先生にぴったりな文房具セットにするためにはどんな情報を集めればよいかな？」と問うことで児童は思考を働かせ，自分で情報を得なければならないという英語を話すことへの必然性をもつと共に，主体的に対話活動に臨む手立てとすることができた。

研究内容Ⅱ－②
学びの調整をする「中間交流」と「振り返り」

活動の間に設ける中間交流を「Sharing Time」終末の学びの振り返りを「Treasure Time」として位置付けた。Unit５の第４時で「先生のヒントをもとに，先生の好みを知るインタビュー」を全員が同時に行う活動を設定した。インタビューの活動を前半と後半に分け，前半の活動後に Sharing Time を設けて，表現の確認や仲間のよい表現についてシェアしながら学び，後半の活動に生かせるように位置付けた。後半の活動後は Treasure Time を位置づけ，仲間が「集めた情報から，どんな思いでどんな文房具セットを作りたいのか」という思いに触れることで次時への意欲につなげる活動を行った。提示されていた先生のヒントと，インタビューの情報を結び付け，「野球が好きだというヒントから，好きな選手や背番号を聞いた。だから選手のデザインの文房具セットを作りたい。」など，先生に「よりぴったりにする」という観点から振り返っている児童が多く，目的意識をより明確にする Sharing Time と Treasure Time を設定することができた。しかし，児童を価値付ける時間が不十分だったため，Treasure Time において，「どんな質問をしていた仲間がどんな文房具セットを作るのか」という児童の関心を十分に高めることができなかった。

そこで Unit７の第５時での食材の買い物をする時間において，前半と後半の活動後それぞれに Sharing Time を位置付けた。前半の活動後の Sharing Time では，良い表現を価値付けるとともに後半の活動によい表現を生かすための Sharing Time として位置付け，後半の活動後には，仲間同士でのよい姿をシェアして価値付ける，Treasure Time の要素の強い Sharing Time を位置付けた。後半の活動終了後は，児童の興味関心は「誰がど

んなデザインのピザを作るのか。」というところに向いている。そのためTreasure Timeでは実際にピザ生地の上に具材を並べたものを撮影し，ロイロノートでお互いのピザを共有した。「どんな思いでこのピザを作ったのか聞いてみたい！」という思いから仲間の考えに触れ，次時以降の活動に意欲をつなげるTreasure Timeとすることができた。このように２回のSharing Timeと次時への意欲付けのTreasure Timeを位置付けることで，自らの学びを客観的に捉え，学びの意欲を向上させる姿が多く見られた。

実践Ⅱ

第６学年Unit4「Let’s see the world.」Unit6「Save the animals.」の２つの単元での児童の変容やそれぞれの単元の成果について研究した。

研究内容Ⅰ－①

探究的な学びのプロセスを意識した単元構想の工夫

探究的に学びを深めていくプロセスに沿った指導の工夫は以下の通りである。

＜Unit４＞	＜Unit６＞
課題設定	**課題設定**
・自分が行きたい国や魅力を感じる国について，紹介したいという目的意識と課題意識をもつ。	・絶滅危惧種について，人間がどんな影響を及ぼしていて自分は何ができるのかという課題意識をもつ。
情報収集	**情報収集**
・食べ物や観光地，お土産など様々な文化に目を向けて情報収集をする。	・絶滅危惧種が絶滅の危機に瀕している原因や理由などに関する情報を収集する。
整理・分析	**整理・分析**
・集めた情報を整理しながら，伝える順序や表現を選択・工夫しながらまとめる。	・集めた情報を整理しながら，伝える順序や表現を選択・工夫しながらまとめる。
まとめ・表現	**まとめ・表現**
・スライドを使用し，一対一で交流を行うことで，たくさんの仲間と交流する時間を設定する。	・作成した啓発ポスターを使用し，ワールドカフェで仲間の考えに対する自分の思いを話せる場を設定する。

第６学年の発達段階において児童が主体的な対話活動をするための意欲となる動機は，自分たちの生活に密接に関わっている出来事について自分の思いや考えを伝える方法が設定されているということや，相手の意見を求めたり多様な考えに触れたりすることで自分の学びが深まっていくことを実感できる場が位置付けられているかということである。目的や状況の設定を工夫することで，単元を通して伝えたいメッセージに深みが増し，生き生きと対話活動をする姿が見られた。

また，第６学年はより中学校を意識した指導の工夫が求められるため，**整理・分析**の工夫に取り組んだ。第６学年の学習到達目標「話すこと」には「概ね正確な語順で」と記されている。児童の「自分の考えを深めて仲間に伝えたい。」という思いを実現するためには，基礎となる知識・技能を習得させる必要がある。そこで，系統的な指導の工夫を図った。「情報収集」した内容を「整理・分析」するための手立てとして，音声のみのリスニングを行った後にリスニングスクリプトを見ながら再度リスニングを行った。このような手立てを打つことで，音声だけでは理解できなかった内容が，文字のヒントと繋げることで理解が深まる。また，このリスニングスクリプトは教師の教科書にのみ記載されているため，児童がそれぞれの端末でいつでも閲覧できるようにUnitごとにまとめてクラウドにあげておく。児童が「整理・分析」する時に，リスニングで得た情報や表現を自分で選択し活用するための準備しておくことで，伝えたい内容を整理して分かりやすく伝えることができる。このような系統的な指導により苦手意識が減り，中学校への円滑な移行を目指した。

研究内容Ⅰ－②

単元間のつながりを意識し児童の思考の流れに沿った展開の工夫

Unit４では，自分が行きたい国や魅力を感じる国の様々な文化について紹介する活動を行った。日本と比較しながら外国に目を向け，視野を広げて調べ学習を進めた。学習指導要領における「伝えようとする内容を整理した上で自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて話す」という目標については概ね達成することができた。しかし，学習到達目標の「話す（発表）」の観点について「日常生活に関する身近な話題について聞き出したい情報を得たり，相手に意見を求めたりするなど，」という部分の，相手に意見を求めるという点では課題が残った。

そこで，Unit６では，Unit４で学んだことを生かしつつ，より学習到達目標を意識し，系統的な力をつけていくための指導の工夫を行った。Unit４で自分が魅力を感じて紹介した国にも絶滅の危機に瀕している動物がいることを知り，魅力的な文化を支える裏で犠牲になっている動物や環境があるという事実に触れた。その事実に直面した児童は，「自分たちの生活が豊かになるほど，犠牲

になっている動物もいる。しかし自分たちも生きていかなければならない。」という思いから，「人間と動物との共存を目指す取り組み」に目を向けた。Unit４からの思いとのギャップを抱えながらも「自分の思いを伝えたい」という児童の思いを交流する場の設定としてUnit６では，ワールドカフェで対話活動を行った。Unit４での課題解決を図るため，ワールドカフェの小集団での対話活動を行った。仲間の意見について自分の考えを自由に伝え合うことができる場を設定することで，伝え合うことの楽しさを感じる姿が増えた。

研究内容Ⅱ－①

目的意識・相手意識を明確にする，児童の意欲を引き出す導入の工夫

Unit４の第１時の導入では，様々な国の観光地や文化など児童が「初めて知った！」と興味を引く情報を提示するために，実際に旅行会社で情報収集を行った。旅行会社だからこそ知っている情報を集めて提示することで，児童自身も情報を集めて仲間が驚く紹介をしたいという意欲をもつ姿が多く見られた。

Unit６の第１時では，児童が一度は目にしたことのあるたくさんの動物の写真を黒板いっぱいに張り出し，これら全てが絶滅危惧種であるという事実を知るとともに，この動物たちが棲む国はUnit４で自分たちが魅力を伝えた国でもあるという前単元との思いにギャップを生む。さらに動物たちの絶滅の原因は人間の生活の発展にあることに触れると同時に“What can we do?”と問うことで単元を通して児童の「知りたい！」「伝えたい！」という意欲を引き出すことができた。

研究内容Ⅱ－②

学びの調整をする「中間交流」と「振り返り」

Unit４でのSharing Timeでは，仲間の良い表現や発表の仕方について交流する児童が多かったが，Unit６ではさらに，仲間の発表に対して「初めて知った。」「絶滅の原因が意外だった。」という内容の中間交流が多かった。これは，児童が仲間の意見を聞くと同時に自分の知識と比べ，思考を働かせながら対話活動を行うことができる姿へと変容していることが分かる。また，Unit６でのTreasure Timeでは「自分たちが使っているスマートフォンのレアメタルを採ることでゴリラが絶滅の危機に瀕していることに驚いた。便利だから使いたいけれど，ゴリラも守りたい。」という葛藤の思いにまで迫ることができ，Treasure Timeを通して考えを深める場とすることができた。

６　成果と課題

・実践Ⅰの実践対象である第４学年の児童を対象としたアンケート結果を以下の表１に示す。

【表１　４年生２９人アンケート結果】

		４月	１２月
英語は好きですか。	はい	３４％	９０％
	いいえ	６６％	１０％
自分から進んでコミュニケーションがとれますか。	はい	３８％	９３％
	いいえ	６２％	７％
使える表現は増えましたか。	はい		９７％
	いいえ		３％
５年生に向けて自信に繋がりましたか。	はい		９０％
	いいえ		１０％

＜成果＞

〇４月の頃は，英語に対して苦手意識をもつ児童が６割以上いた。しかし，児童の意欲を引き出す単元構想や単位時間における活動工夫を繰り返すことで，自分が使える英語で仲間に「伝えたい！」という思いが生まれ，伝わった時の喜びから英語学習の楽しさを感じた児童が多かった。英語の楽しさを実感している児童のアンケートには，

・自分が話したことが伝わることが嬉しかった。
・活動の後の達成感があり，英語でコミュニケーションをとることに自信がついた。

と記されていた。英語を「言語学習」と捉えるのではなく，コミュニケーションを図るツールの一つだと捉える児童が育っているといえる。

〇第６学年ではスクリプトを活用した手立てを行うことで，自分で情報を選択・整理して伝え合う中学校を見据えた系統的な学びの構築ができた。

＜課題＞

●英語は好きで，使えるコミュニケーションも増えたが，不安を抱える児童も一定数いる。

・分からない英語を聞いた時に自信がなくなる。
・５年生で内容が増えて難しくなるのが不安。

という児童がいた。第６学年での成果のような，基礎的な知識を系統的に学んでいける工夫を第４学年でも行うなど，知識のインプットに焦点を当てることが課題だと言える。

７　参考文献

・小学校学習指導要領（平成２９年告示）解説

＜講評＞

２
３
４
５
６
７
８
９
１０
１１